

何故、但馬はお菓子発祥の地と呼ばれる？～但馬・むかし・お菓子ばなし～



むかしむかし、第十一代垂仁天皇は天日槍の孫にあたる田道間守を呼びつけ、食へると歳を取ることもなく、いつまでも長生きができるという「非時香菓」という食へる物を採ってくるよう命じました。その実はずいぶん遠い常世の国にあり、今まで誰も生きて帰って来たことのないといつ荒れた海を渡るなければいけません。田道間守はすぐに旅立ちました。

田道間守の乗った船は、へる日もある日も荒波をかぶり、激しく揺れながら常世の国を目指しました。あまりに激しい波で時には海に放り出されたこともありました。

「海の神様、先祖様、どうぞ非時香菓を無事に持って帰れるようにお守りください。」

何日も何日も一心にお祈りを続けました。

「常世の国は普通の人間に行ける所ではなく、神や仙人が住んでいて人に見せない世界だといつか、いそいそと航海が難しいのだらう。本道に生きて帰れるのだろうか。」

田道間守は長い、長い年月をかけたついでに、常世の国に辿り着くことができました。しかしそのは、いくつもの川が広がり田道間守の行く手を阻むのでした。田道間守は体が凍りつよつよ冷たい川の中を長い時間をかけて歩いて渡らなければならなかつたのです。

やつの思いで川を渡りきった田道間守の前に、今度は天にも届きそうな山が立ちあがって、いるではありませんか。

「非時香菓はきつとあの山の頂にあるに違いない。」

登っては滑り落ちて、滑り落ちては登り、激しい山道を決しておきかめるとなぐ登って行きました。着ている服は引き裂け、髪は伸び、まろでこの世の人とは思えないような容るしい顔になりました。ながらも登り続けたのです。ようやく山頂に立つことができ、そこには緑に生い茂った木々が立ち並び、その木には金色に光る実がぶら下がっているではありませんか。

「おお、これがあの非時香菓。なんとかわねしい香りであることよ。甘酸っぱい香りよ。一刻も早くこの実を持ち帰って天皇様に差し上げよう。きつと喜んでくれるに違いない。」

心を躍らせて山を下り、川を渡り、帰りの船に乗りましたが、またも長く厳しい荒波と嵐との戦いでした。

「天皇様、ただいま帰ってまいりました。このように非時香菓を取ってまいりました。」

田道間守は非時香菓をしっかりと手に持ち、ご殿に持ってあがり、しかし待つておられた天皇は、去年と比べてなつておられました。田道間守はシヨウウのあまり、その場に倒れこんでしまいました。実は田道間守が旅に出てから帰ってくるまで、実に十年の月日が過ぎていたのです。

田道間守はその実を皇太后に差し上げ、残りを奈良の北部にある天皇のお妻にお供えしました。それから田道間守はかたときもお妻から離れず、そのまま天皇の後を追いました。田道間守の心を哀れんだ人々は、いつまでも天皇の近くにいられるように、お妻のそばに彼を葬ったのでした。後に田道間守を祀る神社とする神社が生まれ、故郷の地である豊岡に建てられました。この神社の名前の由来は、お妻が池の中に中島の様に浮いていることから中嶋神社と言われるようになったと伝えられています。田道間守が持ち帰った非時香菓は今でも言いつづつ、日本のお菓子のお菓子の始まりと言われています。中嶋神社はお菓子の神社と言われ、この但馬・豊岡が日本のお菓子発祥の地と言われるようになったのです。